

第八講 20世紀の歴史学

ワイマールの歴史家たち

オットー・ヒンツェ (1861~1940)

比較国制史

『封建制の本質と拡大』1929

『西欧における身分議会制の類型学』1930

アルトゥール・ローゼンベルク (1889-1943)

中産階級のユダヤ人

マルクス主義者

古代史研究者

野村修・訳『ボルシェヴィズムの歴史』(1968年、晶文社) 1932

足利末男・訳『ヴァイマル共和国成立史 — 1871-1918』(1969年、みすず書房) 1928/33

イギリスに亡命

ブルックリン大学

学校における社会科教育

アメリカ流の社会科教育の導入

大学に社会学部の設置

アメリカ流の社会学の紹介

ワイマール期のヒンツェやローゼンベルクの研究の逆輸入

ドイツにおける社会史研究の広がり

第二次世界大戦後のドイツ史学

フィッシャー論争の衝撃

F・フィッシャー (村瀬興雄 訳) 『世界強国への道 - ドイツの挑戦 1914-1918』岩波書店、1972年/83年。

Fritz Fischer、1908-1999年

ハンブルク大学教授

ドイツ外務省の文書：ドイツの東方政策を記す

ベートマン・ホルヴェークの1919年9月9日付の「九月計画」を発

見

(従来の定説)

ナチスによる侵略は弁護の余地はない

カイザーのドイツ帝国は複雑な外交関係の網にかかって不承不承戦争に引き込まれていった

(ジョン・モーゼズの批判)

政府の決定ではなく、実施もされていない

ビスマルクによる複雑な同盟網 (1882 三国 ; 1887 再保障 ; 1890 更新拒否)

オーストリアとの同盟関係

三国協商 (1894 露仏 ; 1902 日英 ; 1904 英仏 ; 1907 英露)

バルカン半島における汎ゲルマン主義と汎スラブ主義の対立

皇帝は戦争を望んでいなかった

(フィッシャーの批判)

ドイツ外務省の文書 : ドイツの東方政策を記す

フィッシャー : ドイツは積極的に戦争政策を推進した

研究方法は極めて伝統的